

日本キリスト教会大阪北教会

2017年2月26日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書16章25節～33節

16:25 「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。16:26 その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。16:27 父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。16:28 わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」16:29 弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。16:30 あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」16:31 イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。16:32 だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。16:33 これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

説教 『世では苦難がある。しかし勇気を出しなさい』

◆私たちは自分の信仰がどの程度のものであるかを自分で判断することはできません。しかし一つのバロメーターはあるのではないのでしょうか。つまり、平素、聖書に記されている御言葉が、自分の人生にとってどの程度の重さになっているか。このことによって私たちはある程度自分の信仰の程度を知ることができるのではないのでしょうか。

◆今日の箇所は、分かりいいようで分りにくいですね。25 節から読んでみます。「『わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。その日にはあなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげるとは言わない。父御自身があなたがたを愛しておられるのである。あなたがたがわたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。わたしは父のもとから出て世に来たが今、世を去って、父のもとに行く。』弟子たちは言った。『今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから

来られたと、わたしたちは信じます。』イエスはお答えになった。『今ようやく、信じるようになったのだが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。』

◆イエス様はしばしばたとえを用いられます。「一粒の麦が地に落ちて死ななければ一粒のままである。しかし地に落ちて死ねば、多くの実を結ぶ」。そして今日の箇所の前でも、「悲しみが喜びに変わる」ということをおっしゃって、「女性が子供を産む時の苦しみと、苦しみを経て、子どもが生まれた誕生の喜びの故に、その苦しみをさえ忘れてしまう」というふうな、これも譬えであります。けれども弟子たちは、いまやもうたとえでなくて、イエス様のおっしゃることが「わかります」と言っていますね。しかし 31 節で、イエス様はこう言われます。「今ようやく信じるようになったのか。だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりにする時が来る。いや、既に来ている」と。弟子たちは、「今、イエス様のおっしゃることがはっきり分かりました」と言っているのですが、イエス様は弟子たちが、言の真相を理解していないと、言っておられるわけです。

◆弟子たちは何が分かっていないのか。今私達が読んでいるのは 16 章の一番最後の所です。そして次ページの 17 章全体が「イエスの祈り」となります。そして 18 章になりますと、「裏切られ、逮捕される」と事柄が展開して行きます。イエス様は御自分が歩もうとされる道が分かっておられるわけです。自分を遣わされた父なる神様が御自分に託された事の明確な自覚のもとで、これまで歩いて来られました。今後もそうですね。イエス様の御側近くでの御言葉を聞き、その行動に与った弟子たちは、今ははっきりと分かりましたと言うのですが、イエス様が父なる神様から託された業としてこれから赴こうとされているのは、十字架であることを、弟子たちは理解していませんでした。しかしそこに神様の御心があることは、弟子たちはそのことを思いもしませんでした。ですからイエスさまは「今ようやく信じるようになったのか。だが、あなたがたは散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしを一人にする時が来る。既に来ている。しかしわたしは一人ではない。父が共にいてくださるからだ」と言われます。

◆これから歩いて行かれる十字架への道。それまでも、正に、父なる神と共に、御心に従ってその道を歩いて来られました。そこに神様の御心があると分かっていたら、弟子たちはイエス様と一緒に十字架につくことも避けなかったと思います。けれども皆それを避けたわけです。イエス様を一人残して、自分の家に帰ってしまい、そして身をひそめたことは後になれば分かります。そのようなことがありまして、本当にイエス様の側近く伝道を自分の目で見て来た弟

子たちにおいてさえ、このような次第でありますから、私たちはこのあとイエスキリストは捉えられて十字架につけられるという事は聖書を読んでいますからわたしたちは知っているのですね。知っているのですけれども、わたしたちの知り方は存在がかかかっていないと言うか、形こそ違え、私たちも、イエスキリストをひとり置き去りにして身を隠してしまうのではないのでしょうか。それがわたしたちの聖書の読み方というか、日々の歩みではないのでしょうか。

◆イエスキリストが復活されて弟子たちに現われ給うた時、弟子の一人トマスは、その場にいませんでした。その様子は、20章24～29節にこうあります。「十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスキリストが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、『わたしたちは主を見た』と言うと、トマスは言った。『あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。』さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスキリストが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスキリストはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」弟子たちのイエスキリストに対する信頼は非常なものでした。でもトマスはイエスキリストが何と言われても見ないと信じない。けれども見て信じるというのは信じ切っていないという事ですね。本当にその人を信頼しているならば、その人の言われる事を1から10まで全部真に受けて信じる。それが「信頼」だと思えますね。

◆皆さんは「預言者的完了」という表現が記憶に残っているのでしょうか。預言者というのは神様に捕えられ神様から御言葉を預かってこれを人々に伝える人の事です。今日の所でもイエスキリストは語っておられることは全て実現して行くのです。弟子たちは先生のおっしゃることは今は譬えでなく、よく分かりますと言っているのですけれども、イエスキリストは「そういうあなたがたが私一人を残して身を隠してしまう」と言われ、本当にそのようになっていくわけがあります。預言者の中の預言者であられるイエスキリストの語られることは、必ず実現いたします。そのようなことでありまして、初めに申しましたように、私達は聖書を自分の人生、生活においてどの程度のものとして、受けとめているか。つまり聖書に書かれてあることがその通り、歴史にも人生にも起こる。そういう神の御言葉として、これを真に受けて、読んでいるか。そうでなければ、聖書を読んだことにならないと思えます。

◆『バルメン宣言』のことをしばしば申し上げますが、これは 1934 年に、ヒトラー政権下で、ドイツ告白教会が行なった、信仰宣言です。6項目あります。その第一項目はこうです。「聖書において我々に証しされているイエス・キリストは、我々が聞くべき、我々が生と死において信頼し、服従すべき神の唯一の御言葉である」。イエス様は、今日の 33 節でこう言われました。

「これらのことを話したのはあなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」繰り返しますが、去年と今年の主題聖句は本福音書 20 章 21 節です。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」これはイエス様が十字架から三日目に弟子たちに現れておっしゃった御言葉です。ですからイエス様は、全てを見越した上で、父なる神様から託された道を歩み抜かれたわけであります。そのような見通しの中で、イエス様は弟子たちを最後まで愛し通されたというふうに聖書は書いております。そのような次第で、弟子たちにイエス様が言われることが次々に起こるわけですね。「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」

◆今日も日曜学校は白熱しました。主イエス様と共に十字架に架けられた二人の犯罪人の話をしました。話が終わると、生徒が「先生、地獄ってあるの」と真顔で聞きますので、「あるよ」と答えました。人は時に「天涯孤独」という状況に陥りますね。例外なく。しかしその時にも「主が共にいます。」このことは動かないわけです。犯罪人の一人が十字架の苦しみの中から、「『イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください』」と言った。するとイエスは、『はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる』と言われた。」これが、わたしたちが信仰によって与っている祝福なのです。如何なる苦難の時にも、十字架の地獄にあっても、主イエスは、私たちと共にいて下さるのです。この事実を、私たちは、もう一度我が事として、我が肉親、家族の事として、友人、知人の事として、信じ、今日からの歩みをなして行きましょう。

◆お祈りいたします。憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。主イエス様が言われますように、私達には様々な避け難い痛みや苦しみがあります。しかしあなたは私達を、その苦しみから、死から、地獄から、解き放つために身を捧げて下さいました。また、あなたは、私達のいつ、いかなる時もいかなる困難、苦悩の時にも共にいまして、私達のために、最善の執り成しをして下さいます。あなたが善き御心を為して下さいますことを信じて歩ませて下さい。この祈りをイエス様のみ名を通し、御前にお捧げ致します。アーメン。